

エコロジカル聖書解釈とは何か

大 宮 有 博

はじめに

本稿の目的は、近年オーストラリア、アメリカ、ヨーロッパの聖書学界で取り組む研究者が増えているエコロジカル聖書解釈 (Ecological Hermeneutics) とは何かを明らかにし、それが抱える問題を指摘することである。この目的を達成するために本稿は、エコロジカル聖書解釈の始まりから現在までの動向を概観する。

1. エコロジカル聖書解釈の定義

まずエコロジカル聖書解釈の定義を試みる¹。次章で述べるとおりエコロジカル聖書解釈者は、ポストリベラル神学的傾向を持つリチャード・ボウカムからパネンセイズムのエコフェミニストまでかなり幅がある。しかし、このエコロジカル聖書解釈者たちは、研究の中心的問いを聖書の「人間中心主義」(anthropocentric) に置くという点で一致する。また、どのような聖書解釈が環境搾取を正当化するイデオロギーを提供するのか。翻って、どのような聖書解釈がよりエコロジカルな読みを提起しうするのか。こういった点を検討する。さらに、エコロジカル聖書解釈は、人間による生物圏の破壊によって引き起こさ

¹ “Ecological Hermeneutics,” in *the Oxford Encyclopedia of Biblical Interpretation*, ed. Steven L. Mckenzie (Oxford: Oxford University Press, 2013).

れる命の危機に倫理的応答を試みる。

エコロジカル聖書解釈は、フェミニズム聖書解釈から「懷疑」と「回復」の規範を取り入れる。「懷疑の解釈学」は、フェミニズム聖書解釈が解釈のストラテジーとして提起したものである。今に伝えられた正典テキストや教父による諸文献の中の女性に関する情報は価値観中立的なものではない。古代教会の歴史において父権制が確立される過程で、女性の指導権を受け入れた初期のキリスト教の神学と伝承の多くは失なわれたのである。したがって、キリスト教の初期の姿を再構築するための史料をさらに広く集めなければならない²。エコロジカル聖書解釈は「懷疑」という点で、聖書とその解釈が環境搾取を正当化していないかを検証する。また「回復」では、環境正義を支持する読みを回復しようとする。

また、エコロジカル聖書解釈は、環境破壊や気候変動によって命の危険にさらされている人間（特に周縁に置かれた女性たち）や人間以外の被造物の声に耳を傾け、キリスト教の人間中心主義的二元論的傾向を批判していくあらゆる神学の領域と統合される。聖書学と組織神学（とりわけエコフェミニスト神学）との間の統合は顕著である。他にもエコロジカル聖書解釈に基づいた説教やスピリチュアリティの分野での研究も有名である。

さらに、エコロジカル聖書解釈は公共神学としての性格を持つ。デイヴィッド・トレシーによると、神学は社会、アカデミズム、教会の3つの公共の場を持つ。神学者は、これらの3つの公共圏において自分の学説の基準、根拠、理由、学問上の立場を明確にしなければならない³。そして神学者はあらゆる神学的テーゼが、(1) 論理構造において明晰でなければならない、(2) 全ての理性的な人々が耳を傾けてくれるようでなければならない、(3) どの人にも普遍的に有効であることを示

2 Elisabeth Schüssler Fiorenza, *In Memory of Her: A Feminist Theological Reconstruction of Christian Origins* (New York: Crossroad, 1994) = E. S. フィオレンツァ『彼女を記念して フェミニスト神学によるキリスト教起源の再構築』山口里子訳（日本基督教団、1983年）、106頁。例えばフェミニスト聖書解釈は正典だけではなく外典・偽典、死海文書などの文献も初期キリスト教における女性の姿を再構築するための史料とする。

3 David Tracy, *Analogical Imagination: Christian Theology and the Culture of Pluralism* (New York: Crossroad, 1981), 46, 56-57.

す哲学的根拠がなければならない。エコロジカル聖書解釈は、聖書を正典とする教会に語りかけるだけでなく、宗教の枠を超え（人文科学、自然科学の垣根も超えて）アカデミズムや社会といった公共の場においても人々を環境正義を回復させるために開かれる対話に招くものでなければならない。

2. エコロジカル聖書解釈のこれまでの動向

このようなエコロジカル聖書解釈がどのように始まり現在に至っているかを検討する。エコロジカル聖書解釈やエコロジカル神学の発端であるリン・ホワイトの論文をまず取り上げる。続いてエコフェミニスト聖書解釈、アース・バイブル・プロジェクトという2つのグループについては、本稿では節を分けて説明するが、近年のアメリカ聖書学会（the Society of Biblical Literature）の年次大会を見る限り、両者はほとんど一つのグループである。次に検討するリチャード・ボウカムの研究は、「懐疑」を規範とするこれまでのエコロジカル聖書解釈に対して、聖書主義的かつ神中心主義を唱えるという点でユニークである。最後に『ラウダート・シ』について検討する。

2.1. リン・ホワイトの問題提起

カリフォルニア大学の歴史学教授のリン・ホワイトは、『サイエンス』誌に投稿した論文「現在の生態学的危機の歴史的根源」で、西洋のキリスト教が環境破壊を正当化したと主張した⁴。この短い論考は発表直後から今に至るまで、多くの聖書学者や神学者によって批判されてきた⁵。言い換えると、エコロジカル

4 Lynn White Jr., "The Historical Roots of Our Ecologic Crisis," *Science* 155 (1967): 1203-7=青木靖三訳「現在の生態学的危機の歴史的根源」『機械と神 生態学的危機の歴史的根源』みすず書房、1999年、76-96頁。

5 論考発表直後のものとしてはGerhard Liedke, *Im Bauch des Fisches: Ökologische Theologie* (Stuttgart: Krey, 1979) =リートケ『生態学的破局とキリスト教 魚の腹の中で』新教出版社、1989年の第3章が、最近のものとしてはRichard Bauckham, *Living with Other Creatures: Green Exegesis and Theology* (Waco: Baylor University Press, 2011)の第2章が、リン・ホワイトのキリスト教批判に応答している。

神学あるいは聖書解釈は、このリン・ホワイトのキリスト教に対する告発に真摯に向き合うことから始まった。

ホワイトはこの画期的論考の中で、西洋のキリスト教の二元論 (dualism) と「人間中心主義」(anthropocentrism) が生態学的危機を引き起こす原因となったと指摘する。創世記によれば、人間は神の似姿を持っているので、たとえ土の塵から造られたとしても自然の一部ではもはやない。このように人間と自然を分けたキリスト教は、人間が自然よりも優れていて、「人が自分のために自然を搾取することが神の意志である」と主張した⁶。このようにしてキリスト教は環境収奪 (environmental exploitation) を引き起こしたと、ホワイトは主張した。論考の終結部で彼は、キリスト教にアッシジのフランシスコの精神に立ち戻るように勧める。彼は「人間の被造物にたいするその専制君主の地位を廃し、神のすべての被造物の民主主義を築こうとした」⁷フランシスコを「エコロジストの聖者」⁸に推す。

このホワイトの論考は、とりわけ神学や聖書学の分野で大きな論争を引き起こし、様々な応答が寄せられた。それらの応答の多くは、ホワイトの主張は教会における創造物語テキストの解釈の伝統については妥当するが、創造物語テキスト自身については妥当していないというものである⁹。例えば、聖書学者ゲルハルト・リートケは、ホワイトの二元論について、確かに聖書には人間と自然との間には差異もありはするが、その間にある質的連続性の方がより重要であると応じた¹⁰。また組織神学者ユルゲン・モルトマンも現代文明を形成する力への意志、増大と進歩への意志は、しばしば聖書の創造論の助けによって公認されてきたことを認めながらも、その公認は聖書そのものの中に決して根拠を持っていないと主張する¹¹このように聖書学者・神学者のホワイトに対する応答は、

6 White, "The Historical Roots," 1205 [88頁].

7 White, "The Historical Roots," 1206 [89頁].

8 White, "The Historical Roots," 1207 [96頁].

9 例えば Liedke, *Im Bauch des Fisches*, 83 [107頁].

10 Liedke, *Im Bauch des Fisches*, chs 2 and 7.

11 Jürgen Moltmann, *Gott in der Schöpfung: Ökologische Schöpfungslehre* (München: Chr. Kaiser, 1985), 39-46=モルトマン『創造における神 生態論的創造論』新教出版社、

いずれもキリスト教を人間中主義的かつ二元論的であるという批判を容認するものの、それらを聖書にまでさかのぼることについては「あまりにも単純化しすぎている」¹²と述べる。

そもそもホワイトの創造物語に対する批判には、創世記の創造物語には祭司資料 (P) によるもの (1:1-2:4) とヤハウエスト資料 (J) によるもの (2:4-25) があることが考慮に入られていない。リー・シェードは、やや古典的な見解であるが、Pの創造物語には人間が地とその生き物を支配するというヒエラルキ的な考え方があがるが、Jの創造物語には人間が神の創造の働きのパートナーとしてこの地を世話するという考え方が示されていると述べる¹³。

リートケは旧約聖書の自然観において「人間が自然の中に埋め込まれていること」を、創造物語だけではなく、詩編やイザヤ書、知恵文学から立証する。また、創造物語と洪水物語は相互補完的であり、むしろ創造物語 (創世記1-2章) は洪水物語 (創世記6-9章) から解釈されねばならないという解釈原理を打ち立てる。この解釈原理に基づいて、「地を支配せよ」という命令をノアへの祝福 (創世記9章) によって解釈すると、(1)「支配」の一つの要素は食物調整にとって不可欠の農地耕作の認可であり、(2) もう一つの要素は人間と動物が共通の生活空間である地に住むにあたって人間が調整を行う責任があるということである¹⁴。人間は、人間と人間以外の被造物との間に抗争があるところでは専制君主としてではなく「調停者」として、「被造物のいかなる部分も生存権を奪われないように、すべてをシャロームへと回復しなければならない」¹⁵。このリートケの研究は、エコロジカル聖書解釈の嚆矢となった。

1985年、53-61頁。

12 Sallie McFague, "An Earthly Theological Agenda," in *Ecofeminism and the Sacred*, ed. Carol Adams (New York: Continuum, 1993), 91.

13 Leah D. Shade, *Creation-Crisis Preaching: Ecology, Theology and the Pulpit* (St. Louis: Chalice, 2015), Kindle edition no. 811.

14 Liedke, *Im Bauch des Fisches*, 132 [172頁].

15 Liedke, *Im Bauch des Fisches*, 137 [179頁].

2.2. エコフェミニスト聖書解釈

「エコフェミニズム」は、フランスのフェミニストであるフランソワーズ・デュボンヌ（Françoise d'Eaubonne）の1974年の著作『フェミニズムか死か』（*Le féminisme ou la mort*）で最初に用いられた言葉である。エコフェミニズムとは、彼女によると「エコロジー革命を起こす女性の可能性」である。ブラジルの女性神学者イボネ・ゲバラによると、「自然世界の破壊と女性に対する抑圧という2つの否定的状況から生まれた［エコフェミニズムという］肯定的な言葉は、家父長制によって引き起こされた生命の破壊に対抗する運動として女性によって作り出された。エコフェミニズムは、女性の尊厳を勝ち取る闘争と生命のプロセスの尊重とを結びつける言葉である」¹⁶と定義する。

エコフェミニズム神学の提唱者の一人であるローズマリー・ラドフォード・リューサーは、デュボンヌがエコフェミニズムを提唱したのと時を同じくして、エコロジー運動とフェミニズム運動とが要求を一つにしなければならないと唱えた¹⁷。彼女によると、私たちの社会は誰かが誰かに支配されていることが関係の基本モデルとなっている。具体的に言うと、私たちの社会は、女性が男性に、第三世界が第一世界に、自然が人間に支配されていることが当然のこととなっている。社会がこのようなままでは、女性の解放も環境の危機の解決もありえない。そこで女性解放運動は環境運動と連帯し、社会経済関係のしくみとその根底にある価値観を根本的に再構築しなければならない。

このエコフェミニズムは、家父長制が作り上げたこの「二元論的ヒエラルキーの支配構造」が文化、思想、科学、商業といった分野で女性と環境に悪影響を及ぼしてきたことを明らかにする。この二元論的ヒエラルキーの支配構造とは、女性から男性を、自然から人間を分けて、女性よりも男性が、人間以外の自然よりも人間を優れたものと見なして、男性による女性の支配、人間による自然の支配を正当化する構造である。そしてエコフェミニズムは、この構造の中で

16 Ibone Gebara, "Ecofeminism," in *Dictionary of Feminist Theologies*, ed. Letty M. Russell and J. Shannon Clarkson (Louisville: Westminster John Knox, 1996), 76.

17 Rosemary Radford Ruether, *New Women, New Earth: Sexist Ideologies and Human Liberation* (New York: Seabury, 1975), 208.

女性が、それもととりわけ第三世界の女性や、少数民族の女性、貧困に苦しむ女性が、自然環境の悪化や気候変動の影響を受けていることを告発する。

このエコフェミニズム聖書解釈は、エリザベス・シュスラー＝フィオレンツァの『石ではなくパンを』に示されるフェミニスト聖書解釈の内部構造から4つの原則を立てた¹⁸。(1) エコフェミニズム聖書解釈は、人間中心主義 (anthrocentism)・男性中心主義 (androcentism) の解釈を退けて、地球志向の視点で聖書を解釈する。すなわち、聖書がどのように女性と地球共同体に対する抑圧を語ったり、解放の言葉を語りかけたりするかを明らかにすることを試みる。これがエコフェミニズム聖書解釈の出発点である。(2) エコフェミニズム聖書解釈は、地球上の人間と人間以外の生命を含む共同体に対する解放の宣言とエンパワーメントを試みる。また特定のテキスト (例えば創世記1-11章、ローマの信徒への手紙8章19-23節あるいはコロサイの信徒への手紙1章15-20節) が環境を考える文脈で教会で読まれるときに及ぼすインパクトについても検討する。(3) エコフェミニズム聖書解釈は、地と地の上の生命が人間に従属することを求めるテキストと女性が男性に従属することを求める人間中心主義的あるいは男性中心主義的テキストを、エコフェミニストの観点からエコ歴史批判的 (eco-historical-critical) に再構築すること (回復) を試みる。(4) これらの過程をへてエコフェミニズム聖書解釈は、聖書の物語を地球と女性の観点から語りなおす。

2.3. ハーベルとアース・バイブル・プロジェクト

アース・バイブル・プロジェクト (The Earth Bible project) は90年代、オーストラリアのルーテル派牧師であり聖書学者でもあるノーマン・ハーベル (Norman Habel) の呼びかけで世界中の聖書学者・神学者・エコロジストが聖書解釈のた

18 Elizabeth Scüssler Fiorenza, *Bread Not Stone: The Challenge of Feminist Biblical Interpretation* (Boston: Beacon, 1984), 15-20 [34-43頁]。ここからエコフェミニズム聖書解釈の4つの原則に整理したのは説教学のクリスチャン・スミスである。Christian M. Smith, *Weaving the Sermon: Preaching in a Feminist Perspective* (Louisville: Westminster John Knox, 1989), 95-101.

めの環境正義の原理を研究するために集まった研究プロジェクトである¹⁹。この頃、エコロジカル神学やエコスピリチュアリティに関する出版はあったが、エコロジカルな観点から聖書解釈を試みる研究は少なかった。このプロジェクトは、単に環境問題のトピックを理解することを目的にして聖書を読むのではなく、地球の観点から聖書を読もうと試みた。このプロジェクトからSBLのthe Ecological Hermeneutics Sectionが誕生し、そこからEarth Bible series (2000-)や*Exploring Ecological Hermeneutics* (2008) といった成果が生み出された。

ハーベルによると、聖書も含めて古典と対話することを通して、自分たちが地球共同体 (Earth community) から多くを搾取し、抑圧し、危機にさらした人間社会 (a human community) の一員であることを自覚する²⁰。言い換えると、私たちはテキストを分析の対象とするのではなく、対話を通して共感を持って関係を持つのである。そのようにテキストに共感することを通して、地球と地球共同体が人間によって収奪され、抑圧され、声を奪われていることと同時に、解放を得ようとしていることを明らかにする。そして、地球共同体の声が込められている伝承を発見して、回復するためにテキストを読むテクニックを発展するのである。

このプロジェクトがアース・バイブル・シリーズで展開する方法の基本は、「懷疑の解釈学」である。この「懷疑の解釈学」によって、そのテキストにおける主体として「地」と出会うことが出来るのである。

このプロジェクトは、エコロジストや神学者との対話を通して「6つの環境正義の原理」を打ち出すに至った。

1. 内在的価値の原理：宇宙・地球・すべてそれを構成するものは内在的（本質的）価値を持つ。

19 Norman Habel, "The Earth Bible Project," in SBL Forum Archive, <https://www.sbl-site.org/publications/article.aspx?ArticleId=291> [2017年1月4日取得]

20 Norman Habel and Peter L. Trudinger, *Exploring Ecological Hermeneutics*, Society of Biblical Literature Symposium Series (Atlanta: Society of Biblical Literature, 2008), 1-2.

2. 相互関連性の原理：地球は相互に関連する生き物のコミュニティである。このコミュニティを構成する生き物は互いに頼り合っている。
3. 声の原理：地球は生きた實在であり、歓喜の声や不正に抗議する声をあげる事が出来る。
4. 目的の原理：宇宙・地球・すべてそれを構成するものは、力動的な宇宙の計画の一部であり、その中で各々の要素はその計画全体の中で役割を持っている。
5. 相互管理の原理：地球はバランスの取れた多様な領域であり、責任ある管理者がそのバランスを維持するために地球の支配者としてではなく、多様な地球というコミュニティのパートナーとして機能することができる。
6. 抵抗の原理：地球とそれを構成するものは人間の不正に苦しむだけではなく、正義を取り戻すための闘いにおいて積極的に人間に抵抗する。

このように「原理」を作ることが、原理で聖書解釈を縛ることになるのではないかという疑問も残る。この原理が提起されてからこのプロジェクトの活動はあまり目立たなくなり、むしろ今ではエコフェミニスト運動の方が活発である。

2.4. リチャード・ボウカム

リチャード・ボウカムの研究領域は広範であるが、聖書を現代社会のコンテキストにおいて解釈する試みは彼の研究の真骨頂と言える。

ボウカムのエコロジカル聖書解釈を一言で言うと、聖書の読みを人間中心主義（anthrocentrism）から神中心主義（theocentrism）に移すものである。彼の創世記1:26の「地を従わせよ」（dominium terrae）の解釈を例に見ていこう。教父時代から中世、西洋の近代初期まで一貫して神学者たちは、ギリシア的な人間と自然の関わりに関する観点で聖書テキストを読んだために、人間による「地の支配」という人間中心主義的な考え方を広めることとなった²¹。すなわち、神は人間以外の被造物を人間のために造った。したがって人間は、人間の益のた

21 Richard Bauckham, *Living with Other Creatures: Green Exegesis and Theology* (Waco: Baylor University Press, 2011), 28.

めに全ての被造物を利用する権利がある。そして、この「地を従わせよ」という権限は、この世のヒエラルキーに結びつく。すなわち、植物は動物のために、動物は人間のために創造された。

しかし教父時代から近代初期までの神学の伝統は、人間を神の被造物の一部であると捉えることで、神中心主義を打ち出している。全ての被造物は神の栄光のために存在し、神によって造られたということ自体において価値がある。人間の自然に対する支配の関係を表す垂直関係は、一人の創造主によって造られた被造物として人間が他の被造物と関わるという水平関係を意識することで補完されたのである。

ルネサンスの人文主義者たちは、創世記1:26の釈義に基づいた「人間の最高の尊厳性」というテーマに没頭した²²。フランシス・ベーコンは、世界は人間の益のためにだけ存在していることを認めるものの、人間の墮落のゆえに人間の支配は損なわれていると主張する。それゆえ自然に対する人間の支配は回復されなければならない。人間の無罪性は宗教によって、自然に対する人間の支配の回復は科学知識の発展によって実現される。この時に人間による自然の支配は、自然世界との関係において神の役を演じることが人間に委ねられた歴史的使命であると理解されるようになった²³。

キリスト教は自然を非神聖化したということで、科学の進歩に同調したと批判されてきた。確かにキリスト教は、自然を神格化することはない。すべての被造物は、神の栄光のために存在し、神の栄光を反映しているという理解があった。神との関係における自然のこのような非実用的な価値が失われたことが、自然の「非神聖化」である。この意味での「非神聖化」は、ベーコンにおいて起きた²⁴。

ボウカムは、リン・ホワイトの指摘する人間中心主義や二元論の問題は聖書テキストそのものにあるのではなく、ギリシア哲学やルネサンスの人間観とい

22 Richard Bauckham, *Living with Other Creatures*, 43-47.

23 Bauckham, *Living with Other Creature*, 47-51.

24 Bauckham, *Living with Other Creature*, 52-53.

うレンズを通した聖書解釈にあると述べる。彼によれば、聖書的テーマ（人間を被造物の共同体の一員とすることや、全ての被造物が神を讃美することなど）は、環境倫理の基盤や、「地を従わせよ」をもっと肯定的に理解する神学的枠組みを提供できる。

ボウカムの聖書解釈の出発点は、環境破壊や気候変動の影響を受けて苦しみを受ける貧困や差別にあえぐ人々—その中でも女性—や人間以外の被造物の「声」ではなく、あくまで聖書である。この点でボウカムの聖書解釈は、ポストリベラル神学の範疇の中に入る。解放を求める被造物の叫びではなく聖書に示された啓示から始まる神学は、「神中心主義」を訴える。しかし、「神中心主義」のエコロジカル聖書解釈は、環境破壊や気候変動の影響を最も強く受けている社会的に弱い不安定な立場にある人々の解放の基盤を提供しない。なぜなら、「神中心主義」の世界観は、人間中心主義の人間を頂点とするヒエラルキーの頂点を神に置き換えただけにすぎず、環境破壊・気候変動に脅かされる命はヒエラルキーの底辺部に置いたままであるからだ。

2.5.『ラウダート・シ』

2015年5月に公布された教皇フランシスコの回勅『ラウダート・シ』は、これまでエコロジカル神学で議論されてきた成果を踏まえて、ローマ・カトリック教会の基本的展望を示している²⁵。環境問題や<宗教と科学の対話>に取り組んできたカトリック教会を超えて多くの聖書学者・神学者が、この回勅に応答をしている²⁶。

25 <https://laudatosi.com/watch> [2017年1月7日取得] = 教皇フランシスコ『回勅 ラウダート・シ ともに暮らす家を大切に』 瀬本正之・吉川まみ訳（カトリック中央協議会、2016年）。

26 例えば『神学ダイジェスト』121号（2016年）にはカトリック神学者たちの応答が寄せられている。ローマ・カトリックの外からの応答としては、John B. Cobb Jr. and Ignacio Castuera, eds., *For Our Common Home: Process-Relational Responses to Laudate Si'* (Anoka: Process Century, 2015) にはプロセス神学者たちの応答が、Grace Ji-Sun Kim and Hilda P. Koster, eds., *Planetary Solidarity: Global Women's Voices on Christian Doctrine and Climate Justice* (Minneapolis: Fortress, 2017) にはエコフェミニズム神学者たちの応答が掲載されている。

まず、『ラウダート・シ』は「エコロジカルな回心 (ecological conversion)」を全ての人に促す(『ラウダート・シ』の呼びかけは、キリスト者にとどまらない)。すなわち、全ての被造物が共に生きる「共通の家」を保全するため、責任をもってその美しさを守るために、「方向性を変えること」を意味する (§5)。「人であるという単純明快な事実が、自分たちがその一部である環境を大切にしよう人々を動かすとすれば、とくにキリスト者は、被造界にあっての責任と大自然と創造主に対する義務とが、自分の信仰の本質的な部分をなす」 (§64) という確信に至る。

次に『ラウダート・シ』は「総合的エコロジー (integral ecology)」を提唱する。「総合的エコロジー」とは、「この世界で人間が占める特別な立場と、自らの周囲との関係を組み込んでいく」エコロジーのことである (§15)。自然との良好な関係は、良好な人間関係、社会関係をともに求める必要がある (§91)。逆に、「地上の被造物仲間に対する無関心や残虐行為は、…他の人間への接し方に影響を及ぼすことになる」 (§92)。「真にエコロジカルなアプローチは、つねに社会的なアプローチになるということ、すなわち、大地の叫びと貧しい人の叫びの双方に耳を傾けるために、環境についての討論の中に正義を取り入れなければならない」 (§49)。

さて、『ラウダート・シ』に見られるエコロジカル聖書解釈を「第2章 創造の福音」を中心に整理する。まず人間について『ラウダート・シ』は、「全ての人は愛から創造され、神にかたどり神に似せて造られた (創世記1:26参照)」 (§65) のだから、「他の被造物を超える格別の尊厳を有する」 (§119) と述べる。また、人間が「耕し守る」 (創世記2:16) 使命を託されていることについて、「『耕す』とは培うこと、鋤くこと、働きかけることを、『守る』は世話し、保護し、見守り、保存することを意味しています。人間と自然の間には互恵的責任というかわりが存在する」 (§67) と述べる。ここで『ラウダート・シ』は、人間に他の被造物を超えた特別な地位があることを認めつつも、「互恵的責任」という言葉を使って人間と他の被造物との関係を説明する。

むしろ、すべての被造物は、復活されたキリストがすべてのものを抱き
照らしてくださっている超越的充満のうちにあり、わたしたちとともに前
進し、またわたしたちを通して、共通の到達点である神へと向かっている
のです。知性と愛を授けられ、キリストの充満に引き寄せられている人間は、
すべての被造物を創造主のもとへと連れ戻すように召されています。（§83）

人間以外のあらゆる被造物が存在する究極の目的は、「人間のため」ではなく、
神のために存在している。そして人間も神のために存在している。人間の責任
は、環境の危機から全ての被造物を救い出し、神のもとに連れていくことである。
さながら人間は出エジプト物語のモーセであり、人間以外の被造物は救い出さ
れる民である。

ところが『ラウダート・シ』は、人間の罪が人間と他の被造物との間に本来
あるべき調和的關係を破壊したと述べている。創造物語は、「人間存在が緊密に
結ばれた3つの根本的関わりにその基礎を置いていることを分かせてくれます。
それは、神との関わり、人間同士の関わり、そして地球との関わりです。聖書
によれば、この重要な3つの関わりは、外部だけでなく、わたしたちの内部でも
壊されました。この破壊こそが罪なのです」（§66）。

神について『ラウダート・シ』は、聖書の中で「解放し、救う神は、世界を
創造された同じ神です。神の中で、愛と強さは一致します」（§73）と断言する。
ここでノートやフォン・ラートの考え方に則るように、創造は救済論的に理解
されている（エレミヤ32:17, 21; 詩編136篇）。この神は全能であり創造主である
（§75）。しかし神の統治は、専制君主的暴君のようなものではなく、被造物の
自律性を妨げず、それぞれの被造物と親密な方法で共におられる（§80）。

キリストについて『ラウダート・シ』は、コロサイの信徒への手紙1:15-20を
引用して、全ての被造物の運命が、先在するキリストの神秘と結びついている
と述べる（§99）。新約聖書は地上のイエスが愛を持ってこの世界に触れたこと
について語るだけではなく（参照：§96-98）、そのイエスが栄光の中に復活し、
「普遍的な統治権をもって」全ての被造物の中に現存していることも啓示してい

る (§100)。そして、全ての被造物は復活のキリストとともにあって、神へと向かっている (§83)。

さて、『ラウダート・シ』は、リン・ホワイトの問題提起にどう応答しているだろうか。まず、二元論について『ラウダート・シ』は、人間も宇宙家族の一員であると主張する (§89)。人間以外の被造物を「資源」あるいは「客体」と見なしてはいけない (§33)。こういう見方が人間による自然の搾取を生じさせ、ひいては人間社会において不平等や不正義、暴力を生み出すことになる。しかし、人間には独自の価値があると同時に重大な責任がある (§90)。『ラウダート・シ』は自然世界を神格化することはないし、人間が他の被造物に対して卓越しているという点を特に否定することもない²⁷。人間は尊厳を持つ存在として互いに尊重されなければならない。それと同じように被造物の仲間と関わりを持たなければならない (§90-91)。そして、知性を与えられた人間は、自然の秩序や、地上の被造物間に存在するバランスを尊重し、究極的目標としての神に向かうように導くことが求められている (§68, 89-92)。

そこで『ラウダート・シ』は、人間と人間以外の被造物との関係を、人間中心主義でもなく生物中心主義でもなく、「生態系」(ecosystem) という概念で説明しようとする (§140)。すなわち、「一つ一つの有機体は、神の被造物として、それ自体において善なるもの、感嘆すべきもの」である。また、「一定の空間に存在し一つのシステムとして機能している調和のとれた有機体の集合」も同様に神の前にあって良いものである。人間はそうした大きなシステムに依存している。この点は、宇宙を有機体の哲学に基づくプロセス神学に似ている。しかし『ラウダート・シ』は、神は被造世界を超越した存在としている点で、プロセス神学と一線を画している。

エコフェミニスト神学者たちは、主に2つの点で『ラウダート・シ』を批判す

27 『ラウダート・シ』は、「行き過ぎた人間中心主義」にも (§115-116)、その対極にある生物中心主義 (biocentrism) にも傾かない (§118)。行き過ぎた人間中心主義は、確かに環境破壊を引き起こした。しかし生物中心主義の立場を取ることは、人間に固有の能力と尊厳があることを否定してしまう。このように『ラウダート・シ』は、人間には他の被造物を超える格別の尊厳があることを認める。

る。まず、この回勅において神は依然として「父なる神」である。このように男性の姿は世界の組織や神の啓示の中心にある。フェミニスト神学（あるいは聖書解釈）はこれまで、家父長制的（patriarchy）や主権主義（kyriarchy）を今に残すキリスト教の伝統を批判し、女性の役割を増強する新しいキリスト教の歩みに積極的に関わってきた。このフェミニスト神学が訴えてきたことは、『ラウダート・シ』には全く反映されていない²⁸。

次にエコフェミニスト神学は、『ラウダート・シ』がキリスト教思想の人間中心主義的側面を克服できていないと考える。この回勅は、汎神論と一線を画すために自然世界の神聖化や生物中心主義を回避してきた。エコフェミニストの提唱する「生物中心主義的統一的世界観」（イボーネ・ゲバラの用語）のようなものはこの回勅にはない²⁹。人間は今も環境から搾取しているのに、あらゆる人間以外の被造物を神のもとに連れ戻す責任があるというのは、さながらDVを続ける夫が、なお家族を毎日曜日に礼拝に連れていく責任があると言うのに似ている。このように『ラウダート・シ』には、肯定できる面もあるが、批判を受けなければならない点もある。

むすび

ここまで私たちは、エコロジカル聖書解釈の生成と展開について見た。エコロジカル聖書解釈は、キリスト教は二元論の人間中心主義宗教ではないかとい

28 例えば Ibone Gebara, “Women’s Suffering, Climate Injustice, God, and Pope Francis’s Theology: Some Insights from Brazil,” in *Planetary Solidarity*, 76.

29 ローザマリー・カリバーンは、エコフェミニスト神学の世界観では、「全ての生命は、神の一つの神聖な身体に包まれ、その中に世どり、その身体を構成する」と述べる。「私たちはこの関係性の中で創造されたと同時に、この関係性の創造者でもある。私たちはこの関係性の主体であり、この関係性は私たちの主体性でもある。…この発見において私たちは神の中に再び生まれ、地球に再び生まれ、この宇宙に再び生まれ、歴史に再び生まれる。正義と互いの尊厳を守ることに基盤を置く人間の関係性の構築において互いに仕える。」Rosemary P. Carbine, “Imagining and Incarnating an Integral Ecology: A Critical Ecofeminist Public Theology,” in *Planetary Solidarity*, 55. この世界観は万有内在神論と重なるものである。

う問題提起に対して真摯な応答をする聖書学者の中で始まったものである。オーストラリア、アメリカ、ヨーロッパで生まれ育ったエコロジカル聖書解釈は、懐疑の解釈で聖書を読み被造物の視点を回復させる立場もある一方で、聖書は正しく解釈さえされればエコロジストにサポーター的なメッセージを語りかける。エコフェミニストやアース・バイブル・プロジェクトは前者の立場を取る。リチャード・ボウカムや『ラウダート・シ』は後者の立場を取る。

本研究はJSPS科研費 15K 02425（課題名『新約聖書のなかの差別と共生——ルカによる福音書の「罪人」テキストの社会科学的解釈』）の助成によるものである。